

平成25年度の事業報告書

平成25年4月1日から平成26年3月31日まで

特定非営利活動法人みやぎ・せんだい子どもの丘

1. 事業の成果

□昨年決議された平成25年度活動計画は以下の通りです。

- ① 2011年3月11日に発生した東日本大震災後に立ち上げた「子どもの笑顔プロジェクト」の活動をつづけます。
笑顔バスの運行を中心に「自立支援ものづくりプロジェクト」「福島県郡山市の外遊び支援(37箇所訪問)」「フロアホッケーの普及」の取組を行います。
- ② 地域における実践の場として、指定管理者として運営を行っている児童館・児童クラブでは活動内容をより一層充実することと、外に向けて広く情報を発信する取り組みをすすめます。今年度から新たに運営を始めるおおさと児童クラブにおいては、町直営からのスムーズな業務の引き継ぎを目指します。
- ③ 仙台市との協議をすすめ、中央児童館の跡地の活用に向けた取組を行います。
- ④ 関係団体と連携し、ジュニアリーダーやボランティアの育成・支援を行います。
- ⑤ 市町村の募集する児童を対象とした施設の指定管理者として応募し、地域での活動拠点づくりをすすめます。
- ⑥ 魅力的な研修会を年間を通して実施します。
- ⑦ 助成金や補助金などを確保し、法人としての体制強化に引き続きとめ、社会福祉法人の設立を目指します。

①～⑦のどの計画も実施し、活動を前進させることができました。

2. 事業の実施に関する事項

(1) 特定非営利活動に係る事業

① 豊かな感性や発想を生み出す参加・体験事業

●「山賊アドベンチャーキャンプ」こどもゆめ基金助成事業①

□開催趣旨：このイベントは、仙台市内の小学生に幅広く呼びかけ、大自然の中のめぐみを体験します。子どもたちにとってその生活(非日常の生活)は限りなく楽しく、興味と興奮に満ち溢れる大切な体験です。

自然体験キャンプは、子どもたちの大きな成長のきっかけであり、日常生活では味わうことのできない体験と友との出会いとなり、人生の指針将来の礎となります。みやぎ・せんだい子どもの丘は「本気で十分と向き合う体験」「度胸」「慎重さ」「勇気」を分かちあう仲間が必要だと考えます。

キャンプの後には「感動」と「自然への感謝」が待っています。そして子どもたちの「本当の生きる力」を貯える機会だと思います。

□開催日時：
①平成25年8月31日(土)～9月1日(日)
②平成26年2月22日(土)～2月23日(日)

□会場：国立花山青少年自然の家

□参加者：
①小学生40名・大人23名 合計63名
②小学生35名・大人24名 合計59名

□報告：仙台市内の小学生に幅広く呼びかけ、大自然の中で夏と冬の2回に渡り体験することができました。子どもたちにとってその生活は限りなく楽しく、興味と興奮に満ちあふれています。

この自然体験キャンプを通じ、子どもたちにとって体験とは色々なことにチャレンジし、成功したり時には失敗を重ねる中で大きな成長へのきっかけとなり、日常生活では味わうことのできない友との出会いになったことでしょう。私たち大人も、子どもたちがチャレンジしていく姿を見守ることにより今までにない体験へとなりました。

そこで学んだこと・感じたこと・伝えたいことは、つぎの通りです。

- ・仲間であり続けるために、自分も成長すること
- ・自分の長所を伸ばし、長所で仲間を助けること
- ・自分のためではなく、仲間のために努力をすること

- ・失敗を他人や社会のせいにしないこと
- ・责任感を強く持つこと
- ・言葉で仲間を励まし、感謝とほめる言葉を忘れないこと
- ・上下の立場に関係なく、応援・はげましの声をかけること

今後、この子どもたちが、自信を持ち・仲間を大切にしながら活動してほしいものだと願っています。

みやぎ・せんたい子どもの丘は「本気で自分と向き合う体験」「度胸」「慎重」「勇気」を分かち合う「仲間」が必要だと考えています。

このようなキャンプを今後も展開してまいりたいと思っております。

●「集まれ子ども芸術家!夏休み・子ども芸術祭」こどもゆめ基金助成事業②

□開催目的：子どもたちがダンス・アート・演劇を通して、自分の心と体を解放し自己表現することの楽しさを感じてもらうことがねらい。学校の先生や保護者の方々、児童館スタッフなど、日ごろ関わる大人以外の様々な表現のプロの方と出会い、色々な表現方法があることを知り、想像力・表現力を豊かに養うこと、また学校の枠組みを越えて友だちと出会い、相手や自分と向かい合うことでコミュニケーション能力や自尊心を育てる目的としています。

①ダンスであそぼう

□開催日時：平成25年7月27日(土) 13:30～15:00

□会場：仙台市通町児童館

□参加者：小学生17名

□講師：西海石みかさ氏(すんぶちょう代表)

□報告：1時間半というあつという間の時間でしたが、参加している子どもたちは終わった頃には達成感と疲労感でいっぱいだったようでした。

最初はみかささんの中で学校別など初めて会った子同士組ませようという意識がありました。やっていくうちに自然と入り乱れていった様子。

各ワークに初めからノリノリで自分を表現していく子や恥ずかしがりながらも少しずつ出してくれる子など様々で、どの子も自分なりの参加を楽しんでくれていたようでのびのびとした笑顔が見られました。

②演劇であそぼう

□開催日時：平成25年8月3日(土) 13:30～15:00

□会場：仙台市通町児童館

□参加者：小学生25名

□講師：野々下孝氏・澤野正樹氏・本田棕氏(仙台シアターラボ)

□報告：仙台シアターラボの野々下さんいわく全体的なモチベーションが高く、意識も強いのでプログラムも予定していたものから少し変えたところもあるったという嬉しい話も。

今回のワークではよく見て真似をするという時間が多かったのですが、みんなしっかり観察しており、想像するところも自分の思いを自主的に発表する子が多く、まわりの子たちもよく聞いていました。

仙台シアターラボの皆さん、「刺激し合うことができ、さらに言語化ができ、その場を楽しめる子たちであった」と反省会でおっしゃっていました。上手に演技をするという前に、演劇そのものを楽しむノウハウをぎゅっと教えてもらった気がします。

③アートであそぼう

□開催日時：平成25年8月25日(土) 10:00～11:30

□会場：アトリエ自遊楽校

□参加者：小学生40名

□講師：大沢佐智子氏(舞台美術家)

□報告：不思議で魅力的なアーティストのみなさんと出会い、思いきり一緒に遊ぶことで、子どもたちは色々な表現があることを知り、色々な職業があることも知れたと思います。

心と体を思うままに解放したダンス、なんにでもどこにでも行ける最強の想像力で遊んだ演劇、パンツまでカラフルになった奇想天外の絵の具遊び。

自分自身やともだちの素敵などころを見つけて嬉しくなったり驚いたりする中でもっと自分を好きになる夏休みになったとしたらとても嬉しいです。

子どもたちがもはやアーティストであり、みかささん、仙台シアターラボの皆さん、大沢さんから絶賛されるような瞬間がたくさんありました。

そんなときの子どもたちは弾けたような笑顔は忘れられません。

また今回関わってくれたスタッフの皆さんが子どもたちに負けないエネルギーで楽しんでその場にいてくれたこと、心から感謝しています。

いつか大人になってふと思出したときに、みんなのカラフルな笑顔があ

の子たちを元気にしてくれることを祈って。

●「みんな de アート」こどもゆめ基金助成事業③

□開催日時：①平成25年9月1日(日) 10:00～12:00

②平成25年10月6日(日) 10:00～12:00

③平成25年12月1日(日) 10:00～12:00

□会場：①仙台市高砂市民センター(仙台市宮城野区)

②仙台市北山市民センター(仙台市青葉区)

③仙台市八本松市民センター(仙台市太白区)

□参加者：①小学生15名・保護者14名 合計29名

②小学生14名・保護者13名 合計27名

③小学生14名・保護者13名 合計27名

□講師：加藤庸子氏(アートセラピスト)

平良亜佐子氏(アート・ファシリテーター)

□目的：様々な障がいを持つ子どもたちは、学校以外での活動の場が少ないのが現状です。今回の活動を通して、彼らにアートを通した表現活動の作品作りの場所を提供し、活動場所を広げていくことが大切であると考えています。

また、保護者との交流や他の児童との交流を通して、子ども達がコミュニケーション力を高めたり、情緒の発達など健全育成を図っていくことを目的とします。

また、事業終了後は当法人が委託管理運営している児童館での展示等も考えています。

□本事業を終えて

全3回の事業を終え、多くの参加者から良い評価を頂くことができました。今回の事業の目的は、「障がいを持つ子どもと親の交流」であり、「制作しながら、ほつと一息つく時間を提供すること」でしたが、それは十分達成できたのではないかと思います。

そして、同時に児童館運営をしている当法人にとっても、対象となりながらも、対応やアプローチに苦慮する子ども達であり、また、その保護者との関係を作りうえで、多くの示唆を得ることをできた事業だと思います。

「アート」は子ども達を解放するものであり、また創造性を生み出すものであり、またコミュニケーションを生み出す「遊び」もあります。

この非言語的コミュニケーションとしての「アート」は、昨今注目されている自分の中の「レジリエンシー(回復力)」を発見することができる重要なツールです。それは、子どもだけでなく、保護者も同様です。

今後の当法人の活動に生かしていきたいと思います。

③講演会・研修会事業

■魅力的な研修会の実施 「現場すぐに役立つ研修会」報告

①第1回「こどものまちの『原点』を知る」

□開催日時：11月13日(水) 19:30～20:40

□場所：仙台市通町児童館

□講師：ゲルト・グリュナイスル 氏 ドイツのNPO法人「文化と遊び空間」代表

木下 勇氏(きのした いさみ)千葉大学大学院教授

□参加者：59名(他団体9名含む)

□内容：最初に質疑応答の時間を取り、ゲルトさんにお答えいただくスタイルで研修をおこないました。その後、参加者が「地域」、「こどものまち」、「児童演劇」、「子どもボランティア」、「おやじの会」の5つのテーマにそつて活動発表を行いました。ゲルトさんから講評をいただきました。

②第2回「ファンタジーあふれる子育てと循環の森～森と風のがっこうを知る～」

□開催日時：1月15日(水) 19:30～21:00

□場所：仙台市通町児童館

□講師：吉成 信夫 氏(よしなり のぶお)

NPO法人岩手子どもの環境研究所(森と風の学校)理事長

□参加者：37名(内 学生4名、一般2名)

□内容：吉成氏の経歴と森と風のがっこうの紹介の後、森と風の学校で行っているサマースクールについてお話をいただきました。

質疑応答もを行い、参加者からの疑問・質問にもお答えいただきました。

③第3回「絵本と出会ってみてきたもの」

□開催日時：2月17日(月) 19:30～21:00

□場所：通町児童館

□講師：増田 喜昭 氏(ますだ よしあき)

子どもの本専門店 メリーゴーランド代表

□参加者：29名（内 学生3名、他団体4名、一般1名）
□内容：メリーゴーランドがテレビで紹介された映像を見た後、増田氏が出会って
きた本や、その作者についてお話し頂き、本を見ることで子どもたちに
想像力の大切さや自分の中に残っている本の存在についてお話
蓄えられる
しいだきました。

④第4回「子どものよさを見つけるために必要なこと

～発達支援を必要とする子どもの理解と支援の実際～」

□開催日時：3月4日（火）19:30～21:30
□講師：佐藤 秀明 氏（さとう ひであき）ここねっと発達支援センター理事長
□場所：通町児童館
□参加者：37人（内 学生4名、他団体1名、一般5名）
□内容：発達支援を必要とする子ども達を支援するうえでのポイントや、子どもの
状況を理解して相手に配慮する「合理的配慮」とはどういうものなのか、
理解力であり、「自分の良さを理解していることで相手のよさ
を理解できる」等、支援
を必要とする子どもたちに関わる人が考えていか
なければならぬ事をお話し下さいました。

■子育て支援者向け研修事業<小規模研修会>助成事業

「子どもと楽しむための遊びネタ研修」

□開催日時：平成25年12月1日（日）14:00～15:30

□会場：イオンモール名取 イオンホールB

□参加者：大人61名・託児2名・参加の子ども40名

□参加費：無料

□内容：①「新聞シアター＆どんちゃんの絵話」

講師：新田どんちゃん＆松村ひろみちゃん

②「子どもと楽しむあそびうたセミナー」

講師：あきらちゃん＆ラーメンちゃん

□報告：昨年度に引き続きの開催で、現場ですぐに使えるネタが随所に盛り込まれ
ていることもあり予想以上の参加申し込みとなりました。会場は被災した
仙台空港も
ほど近く、かつ複合商業施設ということもあり来やすかったよ
うでした。特に子どもを
抱えながら現場で働くお母さん先生からは、『子
ども同伴でも参加可能な研修会は大
変ありがたい』との声を多数いただき
ました。

また、その場で子どもたちの反応を目の当たりにしながら学べ、自分の現
場に照らし合わせ、よりイメージしながら参加いただくことができました。
まずは、新田
どんちゃん＆ひろみちゃんのお話遊び。どんちゃんの大型絵
を披露しながら、その仕組みや子どもへの語り
ばなし「ふしぎなたいこ」
かけ方など説明がありました。

話は民話をベースとした内容で、天狗からたたくと鼻がのびる太鼓をも
った男が約束を破って自分の鼻を伸ばしてしまい、最後には罰が当たり鮒
に変えられてしまうというお話なのですが、子どもたちへの語りかけ、そ
も話しながら進めていて、子どもたちはお話の世界
に入り込み、自分の鼻が伸びない
ように押さえる反応なども見られました。

そして引き続き、松村ひろみちゃんによる『折り紙ワークショップ』・『新
聞シアター』を教えていただきました。新聞という身近なシンプルな素材
を用いて、い
ろいろ工夫しながら話を展開していくことで子どもたちの注
意を引き込んでいきました。

また、見せ方としては、お話の世界に参加者を巻き込み出演させながら進
んでいく劇場型のスタイルで、“演じ方”を工夫すること、子どもたちも
一緒に参加しな
がら話を展開することは、基本的な児童文化についての知
識を深めることを前提とし
ながらも、他の児童文化財にも応用可能であり、
かつ職員同士が協力して工夫する
ことが出来れば、明日にでも現場で活用
できるというお話で、参加者からは大きく頷く
姿が多数見られました。
特に、掛け合いをしながら子どもたちをストーリーのキャストに
して演じ
てもらうことは、物語をより身近なものに深め、かつ子どもがその瞬間、
会場の主役となり、成功体験を積み重ねることにも繋がるとの説明があり
『ネタを学
ぶ』と同時に『見せ方、演じ方、工夫することの大切さ』を感じ
る内容でした。

第2部としてあきらちゃん＆ラーメンちゃんによる『あそびうたセミナー』を行いました。二人は全国の保育所、幼稚園、子ども関係施設であそびうていることもあり、最初から手遊びうたなどを知っている参加者も多数参加してくださいました。

こちらでも前半同様、一緒に参加しながら学ぶポイントを説明していくスタイルでしたが、子どもたちが楽しむためには『言葉遊び』『繰り返すこと』が重要で、そういう子どもと関わる大人からコミュニケーションを図ることが、結果的に子どものコミュニケーション力を高めていくことに繋がるという話でした。「ふざける」のではなく、子どもたちの反応を見ながら「あそぶ」と一緒に楽しめる空間づくりを意識することがあそびうたのポイントという話でした。

また、参加していた子どもたちや大人も一緒にステージに立ち、協力してもらいながらステージを作ることを体験してもらい、大人が率先して楽しんでいる姿を子どもたちに見せることが子どもたちの参加意欲やコミュニケーション力に繋がるという話もいただきました。

「あそびうた」のように、道具が何なくても子どもと楽しい時間を作ることができるなどを参加者は肌で感じていたようでした。

“遊びネタ”研修会ということで、たくさんのおそびうたを覚えながら、体を動かし楽しむことを身を以て体験しましたが、ネタを学ぶことと、それをいかに子どもたちと楽しいものに工夫して変えていくか、その両面を意識し高めることが現場で求められるのだと思いました。

研修会終了後は、研修会で出た遊びネタについてわからないことや見えない部分の仕掛けなどを確認する時間も設けていただきました。

●子育て支援者向け研修事業<大規模研修会>助成事業 「子どもの笑顔・元気サミット」

- 開催日時：平成25年12月8日(日) 13:00～16:00
- 会場：エル・パーク仙台 ギャラリーホール
- 参加者：113名・託児18名
- 参加費：無料
- 内容：①基調講演「子どもと歩けばおもしろい」
講師：加藤繁美氏(山梨大学大学院教育学研究科教授)
②対談 講師：加藤繁美氏／新田新一郎氏

震災後、こども未来財団の助成を受けて開催している『子どもの笑顔・元気サミット』だが、3回目となる今回は山梨大学大学院教授の加藤繁美氏を招聘しての研修会でした。

まず基調講演は加藤氏が提唱する「対話する保育」について御講話をいただきました。講演題目は「子どもと歩けばおもしろい」。

乳幼児期の身体的発達段階と心の発達、その中で生まれる葛藤を経て自我を確立していくメカニズムなど、わかりにくい乳幼児期の成長過程を分かりやすく説明いただきました。

約2ヶ月頃から生理的要求に加えて、自分の体やモノに対して興味を示し確認、探索・探究していく要求と、スキンシップで得た心地よさや、あそびや歌などで

あやされて得た安心と信頼感を自ら求めようとする同調・共
か月頃になって拡大する多様な能力を統合するよ
ィティーの基礎を獲得していくという

感欲求が増していき、10
うな化学反応を起こし、アイデンティ
話を詳しくお話しいただきました。

また、その後の幼児期における第2の自我の獲得については、現場における実例や、実際現場で子どもと向き合い感じる日常の悩み、疑問点なども
み、子どもたちが書いた詩を引用しながら説明して頂き、会
られました。参加者がこんなに真剣にメモを取り
てなように感じました。

そして、後半は子どもが育つ環境について、当団体副理事長の新田新一郎と加藤繁美氏の対談を行いました。

新田から「哲学者の鶴見俊輔氏も訴えるように、子ども期に神話的時間を作れだけ多く経験できるかがその後の人生を大きく作用すると考えられる
乳幼児期～学童期にかけての遊びに没頭する時間、仲間と共に
子どもの育ちにとって、どう影響すると思われますか」
日本の子どもたちは他国に比べ格段に『自分
い』と答えている。無気力な子
もたちが生き生きと
ていく
没入し仲間と創造的、共同的に過ごす時間が子どもの心と社
会性を育むと考えてい
る。そういう時間を担保できるような社会構造、環
的に検討していく必要性があると感じて
いい会社に入る。それが社
業しても正規雇用が
安心が得ら
れる社会構造になっている今、子どもが育つ環境についてもっと先を見
据えて、大きな舵を切ってもいいのでは。子どもがただ教育される主体と
く、子どもが自分のしたいことを自己決定し、共同的に子ども
指すことが必要ではないか。そういった意味で言え
り、国の進むべき方向性を検討するとい
の子どもの育ち、また親や保育
指すべき姿勢につい

書き尽くせないほど実になる講話、考えさせられた子どもの育つ環境、そ
して何より「子どもの育ちと寄り添いながら相互に楽しい人生を送ってい
な風に思える研修会でした。

最後に、参加者から感想をもらい終了しましたが、終了後のアンケートには「先生の話を聞いて悩んでいたことがバカラしくなりました」「これか
との時間を大切に過ごしたいと思います」「育児は終え
ために出来ることを考えてみようと思いま

感欲求が増していき、10
うな化学反応を起こし、アイデンティ
話を詳しくお話しいただきました。
うまく組み込
場中では頷く姿が多く見
ながら笑い楽しそうな研修会は初め

が、先生は
する時間について
「世界中でアンケートをとり、日
の価値が低い』『明るい未来が想像できな
ども、自分の存在価値が低いと思っている現代の子ど
生きていくためには、現場においてどのような関わり、環境を作っ
ることが必要だと思うか』などの質問が投げかけられ、加藤氏からは「神話
的時間を作ることはとても重要。それを私は『虚構と想像の物語』と表現
しているが、
境をいかに作り上げていくか建設
いる」「一昔前は頑張ればいい大学に入れ、
会的に認められる指標になっていたが、今は大学を卒
業しても満たない。学校で頑張って良い点数をとっても確信的な
半分に見えない社会構造になっている今、子どもが育つ環境についてもっと先を見
据えて、大きな舵を切ってもいいのでは。子どもがただ教育される主体と
く、子どもが自分のしたいことを自己決定し、共同的に子ども
指すことが必要ではないか。そういった意味で言え
ば、教育について一度立ち止ま
り、作業が必要かもしれない」など、乳幼児期
者の関わりだけでなく、子どもが育つ環境、大人の目
ての意見も聞くことができました。

書き尽くせないほど実になる講話、考えさせられた子どもの育つ環境、そ
して何より「子どもの育ちと寄り添いながら相互に楽しい人生を送ってい
な風に思える研修会でした。

最後に、参加者から感想をもらい終了しましたが、終了後のアンケートには「先生の話を聞いて悩んでいたことがバカラしくなりました」「これか
との時間を大切に過ごしたいと思います」「育児は終え
るために出来ることを考えてみようと思いま

ら帰って、子ども
ましたが、未来の子どもたちの
す」など、研修を受けて考え方や今後の目

標を変えたという方も多く、今は大きいものだ

回「子どもの笑顔・元気サミット」で参加者に残した成果と感じました。

④子どもが育つまちづくりの事業 ならびに ⑤子育て支援事業

■指定管理者制度にもとづいて仙台市岩切・通町・鶴巻・八本松・荒巻マイスクール・立町マイスクール、利府町西部児童館、利府町児童クラブ・芦の口 児童館・大郷町おおさと児童クラブで展開した委託事業報告

■仙台市岩切児童館

開館から8年目を迎えた児童館。仙台市の掲げる4つの柱に沿いながら、大変充実した児童館活動を展開できた1年だったと思う。

○健全育成事業

子どもボランティアの活動も企画事業を通し、中高生やJL、大学生など様々な年代のボランティアと関わることで、多様性をみせてきている。特にハロウィン・パーティー等ではそれの特技を生かし、来場者をもてなしていた。また、震災から3年目ということもあり、やっと本来の自分の姿を出せるようになってきた子どもたちの気持ちをくみ取るため、心のケアもスタッフと臨床心理士の先生方と継続し行ってきた。

○子育て支援事業

0.1歳の乳幼児の児童館の来館者数が増えている。岩切こそだてネットワークでの会議でも、イベントを行うことだけではなくそれぞれの持つ悩み等も共有しながら活動を行っていた。新しく始めた乳幼児向け事業では、保護者同士の交流や子育ての悩みを楽しげに変えられる企画を取り入れた

○地域交流事業

地域で何ができるかの視点に立ち、様々な機関と連携し活動できた。家庭教育地域交流会の事業も、充実期を迎えていてイベントだけをするのではなく、「岩切発育む・みつめる・思いやる」という障がいをもつお子さんや保護者の方への理解など研修や講演会など1年をかけてみなで小冊子を発行することができた。

○児童クラブ

児童クラブ事業を保護者会と一緒に充実した運営ができた。児童館だけではなく、外部の児童館との交流事業や、親子事業など子どものあそびを通して様々な気づきをスタッフとも・保護者が共有できた一年だった。

■仙台市通町児童館

平成25年度の年間利用者は約27000人で毎月の利用もほぼ一定した人数となった。昨年度から見られた乳幼児親子の利用の増加は25年度も同様で、特に乳児親子の利用が目立ち、対応する活動の必要性を感じられた。そこで、年度後期から乳児親子対象の行事を行ったが(赤ちゃん広場「おいっちに」⇒乳児の成長を促す大人の関わり方や遊び)赤ちゃんと向き合う大切さを知り、また参加した親同士の交流も深まった。26年度は0,1歳児親子の行事へと進めていく予定になっている。

当館の基本方針でもある「子どもの文化の継承」に関しては、11月に行った「子どもの文化創造祭」に子どもボランティアが主となって人形劇を上演したが、それに向けて子どもと職員が一体となって進められたことが収穫だったと思う。日常でも児童クラブの子どもたちによる紙芝居や、帰りの会での「素ばなし」など、子どもたちに「動」から「静」への活動も体験させている。

12月に行った仙台元気アップ事業「遊びでつながるまちづくり」では、地域の団体や個人の方々とのつながりが生まれ、その中で地域での防災への取り組みや障害の有無にかかわらない子育て支援を考える基盤づくりが生まれてきた。26年度は地域のネットワークづくりにつなげる活動を予定している。

また、学生ボランティア自身に企画運営させての「ボラとあそぼう」(2回実施)は、学生ボランティアの資質向上にもつなげられたと思う。

小学4~6年の子どもボランティアも従来の活動に加えて、他館や他団体との交流活動も行った。また、「フラフープ大会」「お化け屋敷」などの自主企画行事も行い、子どもたちが自ら考える活動の楽しさ、そして難しさも実感したのは、今後の活動に向けての良い体験になったと思う。

このように、25年度の活動を通して次年度への課題も見えたが、それは児童館の方向性にもつながる意味として積極的に考えていきたいと思っている。

■仙台市立町マイスクール児童館

地域の皆さんに気軽に利用してもらえる、気軽に立ち寄ってもらえる児童館をめざして様々な活動に取り組んだ。初めて企画した「あきまつり」には、近隣の保育所の子どもたちや障害児通所施設の親子さんに来館してもらい交流を深めることができた。

また、今年度から開始した出前児童館では、地域の育児サークルに出向いて親子あそびや創作活動などをおこない共に子育てを考える時間とすることことができた。

また、地域の皆さんに豊富な人材を活かし、防災士のお母さんによる防災講座・楽器の得意

なお母さんによるふれあいコンサートなどを企画し、児童館をより身近に感じてもらえたようにし、参加者に好評をいただいた。

昨年度発足したお母さんたちによる自主的な活動は定着をみせ、今年度はお花見にでかけたり地下鉄を利用して遠足にでかけたりなど、児童館を飛び出しての活動にまで広がりをみせた。活動を通してお母さん同士の交流も広がっている。

共催事業や大学生企画の活動、また、地域の畠屋さんによるワークショップ、茶道やお琴などの伝統文化に触れる体験などを通して、子どもたちは様々な経験ができた。

荒巻マイスクール児童館との共催事業では食育プログラムに取り組み、借用した畠で大豆や白菜を植え親子でみそ造りをしたり収穫体験をしたり自分たちで食事作りをすることでも、食べ物に興味・関心が広がった。

大学生企画の“ペットボトルロケット教室”“フラッグフットボール”“ちゃれんじパーク”を計4回実施し充実させることで、高学年の子の参加や親子での参加もみられた。

子どもたちが心待ちにする活動になってきている。

子どもボランティアは、西公園プレー・パーク・通町児童館と合同で、西公園に木の名札をつける活動に取り組んだ。中学生の登録もあり、都合に合わせて来館し活動をするという形を続けてきた。

地域のみなさんに協力をいただき、また、共催・協同という形をとることで多彩な活動ができる1年だった。

■仙台市芦の口児童館

◆開館から2年…

開館当初母親に手を引かれ遊びに来ていた子たちが今年の4月から幼稚園に通い始め制服姿で遊びに来る。開館当初に授かった子たちが1歳になりお祝いを一緒にした。転勤で引っ越す親子のお別れ会を母親たちが自主的に児童館で行った。子どもが幼稚園に行ったから地域でお手伝いをと、立ち上げて1年になる子育て支援クラブ『あしづこ』のメンバーで活躍する母親。開館当初幼稚園児だった子たちは小学生。自由来館でひとりで来れる事に得意げにやってくる。『人が人とかかわり人となる』…出逢いとつながりの場所として子どもの成長の場として児童館も素敵に成長してきている。

◆留守家庭「むくどり夢の家」から児童クラブ「むくどり」へ

『顔の見えるお付き合い』と親同士のつながりも大事にしてきた保護者会も留守家庭時代にはなかった48世帯という世帯数の多さにとまどいを隠せないが、夏のキャンプを共催で企画実行、児童館まつりでも屋台を担当し盛り上がり親睦を深めることができた。この2年間で業務の引き継ぎはおおよそ移行はできたが、毎年新1年生を迎え、保護者間の想いと願いの共有が今後の課題となり、職員は子どもたちを真ん中においた活動と運営ができるようコーディネイトしていくたい。

◆地域とのかかわり

芦の口市民委員会主催の『芦の口コミュニティ祭』にむけて、こどもたちの太鼓に加え、乳幼児親子の『すずめ踊り』の練習会を企画し、当日18組で参加披露し地域の方々から喜ばれ好評を得た。その後、夏祭りの囃子を自分たちでやりたいと連合会や体育振興会で声があがり、太鼓チームの結成の日も近いようで協力を頼まれている。また、復興支援住宅に入居する方々への支援の説明会への参加を地域と連携をとって児童館でできるサポートをしていきたい。

◆いろいろと支援の必要なこどもたちの現状…

持つて生まれた困難なのか、生育環境からの困難なのか…コミュニケーションがうまくとれないこどもたちの数がぐんと増えた。児童クラブだけでなく自由来館の子どもたちのトラブル、悩みを聞くことも多い。小中学校・高校との密な情報交換や専門の機関との連携、保護者との面談等を行い、こどもたちを真ん中においたサポートを展開している。

■仙台市荒巻マイスクール児童館

<児童館活動>

地域に開かれた、子どもの安全・安心できる居場所や遊びの提供、子どもが育つ地域社会との連携と環境づくりをもとに児童健全育成事業に取り組み、乳幼児親子のあそび場の提供と子育て支援、こどもたちの放課後の居場所作りを日々来館者ひとりひとりに丁寧に向うき合う事を大切にあそびの環境を提供してきました。

○事業の展開

児童館事業を行う上で「体験活動・地域とのつながり・継続」にポイントを置き、これまで以上に地域住民とより顔の見えるコミュニティーづくりネットワークづくりを念頭に活動してきました。

昨年に引き続き荒巻地区の夏祭りや北仙台地区防災ネットワークに参加し、また開かれた児童館活動を1回のみならず、継続的アプローチすることによりプログラムの発展・展開をすることができました。

○児童クラブ保護者との連携クラブの活動では、登録している子どもたちだけの活動だけではなく、保護者それぞれが意識を持ち長期休業にあたり説明会のあとサロンなどを開き、大人同士も楽しめることにより子どもを取り巻く環境づくりの活動してきた。

○あそびの提供

乳幼児親子向け活動や小学生向けの活動において、あそびの提供・仲間づくりの支援を丁寧に行い、活動を展開してきました。

荒巻地域のお父さん・お母さんで活動する「あら！とおちゃん＆かあちゃんず」は、地域の元気の源として「夏まつり・親子 DE キャンプ・もちつき」など活動の幅を広げ、児童館を拠点として活動をしてまいりました。

また、年長児童(4年生以上)の活動として子どもボランティア活動を大きく展開でき、次へつながるリーダー核を育て、地域に発信してきました。

これまで同様、子どもから大人までもがあそびの持つ力を生かし、心の解放や体験できる環境・3つの間(時間・空間・仲間)をモットーに子育て情報ステーションとして

日々思い切り遊べるよう心掛け、初心を忘れず活動をしていきたいと思う。

■仙台市鶴巻児童館

平成25年度は震災後3年目を迎える節目の一年として、他団体の支援受入れと併せて他児童館との連携を図れたこと、また震災以前の活動を取り戻し、地域を中心に据えた子どもの環境づくりを精力的に行えた一年となった。

乳幼児親子対象として0歳児、1歳児親子の行事を企画し、子育てで一番悩む時期のお母さんに寄り添える講話やお茶のみ、ママ友作りなどを行った。他にも乳幼児親子や地域のおじいちゃんおばあちゃんを対象にサロンの開催、音楽遊び、創作活動等多様な内容で利用の増加を図り、日常の遊び場、居場所として利用する意識も広まってきた。

小中高生については、コンビニ食やインスタント食が日常になっている今、作って食べることを身近に感じてもらうため月1回クッキングを行い、畑で野菜を育て調理するイベントを行うなど食育を意識した行事を行った。

また絵本作家や、様々なプロの人と会う場を設け、コンサート、創作活動、キャンプ、遊び、昔遊びを行うなど、たくさんの体験を行える機会を作った。

田子児童館とはドッジボール交流、岡田児童館とは相互の交流行事、高砂中学校区4児童館では連携事業としてお祭りを開催することができ、児童館同士の連携も強く図れた一年だった。

中高生は行事利用は少ないものの、夕方遊戯室を居場所として利用する姿が多く見られ、小学生とも交流する場面も日常的に増えてきた。そして小学高学年対象に子どもボランティアも結成し、毎月自主活動を行うとともに児童館行事もサポートしてもらった。

児童クラブを中心に結成した劇団「わんにゃんぶう」も市内文化施設で2公演行うなど、子どもたちが積極的に活動できる機会の提供もできた。

そして様々な地域の方に協力頂き行事を行い、特にハロウィンでは高齢者、お店、施設所に協力してもらい交流できる機会を作り出すことができた。

他にもこどものまちやもちつき大会では、多くの地域の皆さんに協力を頂き、児童館が子どもを中心に地域交流が図れる場だと知っていただけた。

一年振り返ると、子どもたちが生き生きと活動し主体的に参加できる行事ができた。

さらに震災で繋がった絆を活かしながら地域と子どもが繋がり、地域で子どもの環境を考え土台整備ができた一年になったと感じる。

■仙台市八本松児童館

仙台市の設置目的に基づいた管理運営上の基本方針に沿いながら、大変順調に運営できた。利用者は2万4千人を超える児童クラブだけでなく、乳幼児、一般の方、そして中学生・高校生が事業の有無にかかわらず日常的に利用してくれたことはとても大きいと思う。

児童館事業としても、地域の独自性に合わせた活動、乳幼児向けや児童健全育成事業を多く実施し、沢山の方に参加していただいた。特に児童館まつりは、地元の団体はもちろん、不登校生が通うフリースクールの生徒、地元中学生、高校生など多くの子ども達が積極的に参加し、一緒に作り上げ、300人を超える来館者を迎えることが出来、例年以上の盛り上がりを見せた。

まさに当館が目指す「子ども参画型事業」を実施することが出来たと思う。

力を入れた中高校生との活動は彼らをジュニアボランティアとして受け入れ、スポーツや遊びを通じて、年少者との交流の場を作ることが出来た。

また、小学校4年生以上を対象にした「こどもスタッフ」は今年度も自主事業も企画、実施した。企画会議の中からは、新たな活動として「読み聞かせ隊はちばっくり」が生まれ、小学校1年生以上からメンバーを募集。地域の保育園に出かけ、「読み聞かせ＆ダンス」を行い、大成功を収めた。受け入れ側にも演者となった子ども達にも大変好評で、児童館を飛び出し、自分たちの地域で活動し、地域や年少者を対する心や自尊心を育てる活動として実施出来たことは今年度の大きな収穫だった。

その他にも新規事業として地域の高齢者メンバーで構成された「グランマ・グランパの会」を立ち上げ、サポートし、子ども達や乳幼児の保護者との交流事業を実施、メンバーから「新たなやりがいを見つけた」と大変喜んでいただいた。

来年度も安心安定な児童クラブ事業を行いつつ、異世代だけでなく、新しい住民と昔から住む住民との交流の場としても、さらに地域の方々に喜んでもらえる児童館活動を行っていきたい。

■利府町西部児童館

今年度も0歳から18歳までの施設として地域に利用しやすい愛される児童館運営と利府町の健全育成に努めた。

①子どもを中心に置いたボランティア活動、表現活動の促進

・子どもボランティアの育成活用に力を入れ児童館の行事の企画参加、独自の行事企画、実施など活動の中で子ども自ら行動し他者の為に働く喜びを体験することで、社会性 を学ぶ機会になっている。りふーる劇団を作り公演をすることで、児童同士の交流 と表現力やコミュニケーション能力向上、保護者のボランティアで公演を実施でき協 働で児童健全育成に寄与できた。

②地域の人材活用や体験の場としての活用促進

・行事の講師に利府町在住の講師を積極的に企画、実施し地域の人材発掘、活用とともに地域の方が活動するきっかけにもなり地域活性化の促進に寄与した。(リトミック、ベビーマッサージ、読み聞かせ、囲碁教室、お茶、琴、フラワーアレンジ等) ③多様な団体との出会い、文化的な企画の提供

・児童文化財の伝承やプロの、アマのコンサートや劇、障がい者、動物介在教育、など 普段触れ合う機会のない活動をしている団体、個人に出会うきっかけを作ることで、 感性を育てることに寄与している。(影絵、ワークショップ、アート、等) ④当NPOの人材派遣による地域の健全育成の促進

・子ども会行事や町の企画行事や研修の講師、町内会の夏祭り、花壇づくり、などの活動促進に寄与した。

⑤NPO独自の研修(発達障害)による職員の技術向上

・発達障害児の理解を深めることで適切な対応、保護者への支援も出来、子育て支援になっている。

⑥あそびうたコンサートやネットワークの協力で地域貢献コンサート開催

・親子で楽しむ機会が増え子育て支援に寄与している。(オマチマンコンサート、コロ ッケちゃんコンサート)

⑦中高生の利用増加

・ジュニアリーダー活動場所を西部児童館に移し、ジュニアリーダーの技術向上にも協 力、子どものまちの企画、運営を協力するなど連携を深め中高生の活躍の場の提供に 寄与した。

3年間の指定管理業務も終了し事業の実績を認めて頂き、平成26年度から3年間も管理運営することになった。

■利府町児童クラブ

利府町児童クラブはしらかし台小、青山小、利府小、葉山、利府二小、利府三小児童クラブと六カ所の児童クラブがあり、利府町より「NPOみやぎ・せんだい・子どもの丘」が、 平成23年度から平成25年度までの3年間業務委託を受けている。

今年度は委託を受けてから3年目を迎え、当法人の方針が職員間で浸透し充実した活動が出来た。

○六カ所の児童クラブの事業運営を均一に行うために、西部児童館にて各児童クラブの指導員が週一回の事務連絡、月一回のリーダー会議を行っている。会議等の内容を各児童 クラブに持ち帰り報告、情報を共有する事により職員間で仕事に対する意識向上につな がり、スムーズに児童クラブ運営が出来た。

○利府町内のボランティアサークルとの交流(更生保護女性会、年2回)利府町内で行われている行事に参加(利府町文化祭、写真等にて児童クラブの様子を紹介)することにより地域との結びつきが深まり子どもたちの意識が次年度への期待や希望に繋がる。

又、異世代の方との交流により話しの輪が広がり昔の遊びや文化を学ぶ事が出来た。
地域にも児童クラブの活動の様子を知らせる事が出来た。

○当法人の理事を招き、年間を通して「各児童クラブの事例検討」「こころのケア」等の自己研修、ワークショップを行った。研修に参加する事により自身のスキルアップとなり、 指導員としての意識向上につなげることができた。

○夏季休業日に「かき氷り大会」を行った。保護者の方にも参加の声掛けをするが平日とあって中々厳しい状態であった。指導員と子どもたちだけの所が多くたがなかには子どもと過ごす時間が少ないのでと、参加の保護者の方もいておしゃべりをしながら美味しく、楽しく「かき氷り大会」を終えることが出来た。

来年度は多くの保護者の方や児童クラブに来て下さる団体の方にも声掛けをして楽しい交流が出来るように努力をしていきたい。

今年度も保護者の方や地域の皆さんの協力をいただいき活動が出来た一年だった。

■大郷町おおさと児童クラブ

おおさと児童クラブの初年度の活動目的は、大郷町直営の体制からスムーズに引き継ぐことでした。

そのためにこれまで同様に大郷町直営時の5人の職員全員を我々のNPOの職員として雇しました。

その職員と佐々木ゆみ子地域担当理事の努力により、手続き・運営上のルール・各種行事など予想以上のスムーズな引き継ぎを行うことができました。

⑥児童文化活動にかかる事業

■「みやぎ子どもの文化創造祭」

□開催日時：平成25年11月4日(月・祝) 10:15～13:00

□会場：エル・パーク仙台 ギャラリーホール

□参加者：238名

□参加費：無料

□内容：これまで宮城県中央児童館跡地にて復活・開催してきた“みやぎ子どもの文化フェスティバル「人形の森」”が「みやぎ子どもの文化創造祭」として生まれ変わり、子どもから大人までたくさん笑って笑顔あふれるイベントとなりました。

●オープニング 立町マイスクール児童館の子ども達

●「歌う絵本おはなし会」 岩切児童館の子ども達

●「つるまきの夜」「せんぶわたし」鶴巻児童館「わんにゃんぶう」

●「おだんごぱん」 通町児童館 子ども人形劇

●「スイミー」 NPO みやぎ・せんだい子どもの丘 劇団「ぱあに」

●「不思議の国のアリス」 利府西部児童館 子ども劇団「りふ～る」

□報告：児童文化財は、子どもの発達を促す環境の一つであり、生きる力のエネルギー源となる楽しさがいっぱい含まれています。

宮城県中央児童館で行われてきた児童文化財の歴史の中にも、児童文化財に親しむことは、子どもたちの情緒を安定させ、創造性を高め、情操を豊かにし、子どもの成長過程で多くの児童文化に出会うことが、子どもたちを取り巻く環境に大きな変化を与えることをいち早く取り組んできました。

そのため、私たち「みやぎ・せんだい子どもの丘」は先人たちより受け継がれてきた児童文化財の理解を深め、自ら継承できる人的環境を目指し整えてきました。

これからも私たちは、「みやぎ 子どもの文化創造祭」としてたくさんの子どもたちが人形劇や児童劇を行い、児童文化の輪を広げることを続けていきたいと思います。

⑦調査・研究事業

■今年度に発表した調査・研究はありませんでした。

⑧情報の受発信及び提供事業

■情報については、HP・ブログを通して行いました。また、各児童館では毎月「児童館だより」を発行しました。地域内の小学生はもちろん、幼稚園・保育園・町内会等を通してそれぞれ500部から1400部を印刷・配布しています。

⑨行政、他NPO団体、子どもにかかる各種団体とのネットワーク事業

■関係団体との連携・ジュニア・リーダーやボランティアの育成

□宮城県地域活動(母親クラブ)連絡協議会の事務所を提供するなど、関係団体との連絡は年々深まっています。

各児童館ごとにボランティア担当を決めて、年間4回のミーティングを実施しました。

■市町村の指定管理者の公募

□白石市の児童館・児童クラブの業務委託事業に手を上げましたが、選ばれませんでした。

■宮城県中央児童館跡地活用

□具体的な進展はありませんでした。現在本館の解体は終了し更地になっています。

■「但木卓郎先生を偲ぶ会」

□開催日時：平成25年11月4日(月・祝) 16:00～17:30

□会場：エル・パーク仙台 ギャラリーホール

□参加者：70名

□内容：平成25年2月にご逝去なされた宮城県中央児童館初代館長で、私どもの顧問として活動を支えてくださった但木卓郎先生を偲ぶ会を開催いたしました。

⑩その他必要とされる事業 「子どもの笑顔元気プロジェクト」

2011年3月11日に発生した東日本大震災後に立ち上げた「子どもの笑顔プロジェクト」の活動をつづけました。宮城県内は56箇所(5,026人参加)、福島県内は77箇所(8,076人参加)、

岩手県内は 5 箇所(259 人参加)、合計で 138 箇所(13,361 人)の参加でした。

今年度は、特に福島県の「外遊び支援」に取り組みましたので、福島県内での活動が回数 参加人数ともに増加しました。

自立支援ものづくりプロジェクトは、「お多福会の手工芸支援」として、福永・五十嵐の2名が取り組みました。

フロアホッケーについては、職員有志の参加による研修会(20回)を実施しました。

活動の報告は以下のブログでおこないました。(http://kikaku-blog.p-kai.com)

■平成25年度決算

□当期純利益金額は予算 0 円に対し 103,902 円。

□総収入予算は、予算 216,981,000 円に対し 224,162,983 円(103.3%)

指定管理料の総額は、予算 214,681,000 円に対し 215,030,000 円(100.1%)

それ以外の収入(会費・助成金など)は、予算 2,300,00 円に対して 3,755,202 円(163.2%)

事業外収入は 5,377,781 円で指定管理料以外の合計は 9,132,983 円で全体の 4.07%でした。

□販売費及び一般管理費は、予算 216,981,000 円に対して 225,351,733 円(103.8%)。

そのうち人件費(役員報酬・給与手当・雑給・賞与・法定福利費含む)は 188,815,575 円で 83.7%でした。

□売上総利益から販売費及び一般管理費を引いた営業損失は▲1,188,750 円でした。

□経常利益は 350,502 円(0.15%)、税金は 246,600 円で当期純利益は 103,902 円(0.04%)でした。